離島における文学教育

――「近代の小説」を取り扱って――

平野嘉久子

「離島における文学教育」という題目をつけているけれども、この一文は、離島における文学教育のあり方というようなものをうんぬんしたものではなく、ただ私のささやかな実践――小説単元の実践を通して感じたこと、おもに困っていることの報告である。

この六月、一年生を対象に行なった授業を中心に記してみたい。

とりあつかったのは、角川書店版「高等学校国語一総合」の単元「近代の小説(一)」で、ここには夏目漱石の「草枕」、川端康成の「伊豆の踊り子」及び芥川竜之助の「舞踏会」が採られている。私は、前単元「古典入門」の最終時に、芥川竜之助の「芋粥」を読んで聞かせていたこと、抜粋でなく全文がとられている作品であることを考えて、芥川の「舞踏会」を最初にとりあげ、次に「伊豆の踊り子」、最後に「草枕」という順に、ほぼ、次に記するような授業を行なった。

I、「舞踏会」（三時間）

主要目標　テーマ探求→表現に迫る。

A

第一時（前単元のあと20分）（六月十三日(月)）

1、通読、（各自黙読）

2、難語句提出（メモして提出）

机間巡視の際、メモを見て、共通の難語句は板書、適時説明。

第二時（六月十五日(水)）

1、通読（籠読、音語により難語句処理）

2、感想発表

←(二)の意義について

3、話しあい→主題探求

第三時　（六月十六日(木)）

1、テーマについて話しあい

2、主人公の人物、性格について

→本文の表現にかえる。

3、補説　表現を味わう。

B

第一時（六月十三日(月)）

Aに同じ。

第二時（六月十五日(水)）

1 ｝Aに同じ。
2

3 順に読んで解説

第三時（六月十六日(木)）

1 順に読んで解説

2 テーマについて話す。

3 疑問点提出・解決

Ⅱ 「伊豆の踊り子」（三時間）

主要目標 表現のよさを味わう。

第一時（六月十七日(金)）

1 通読（各自黙読）

語句注釈プリント配布

2 感想を書かせる。

3 感想を発表させる。

4 補説 主に川端康成について

第二時（六月二十日(月)）

1 感想文を読んできかせる。

2 踊り子とわたしの感情のふれあいに注意させる。

3 はじめから順に読んでいく。 とくに表現の鋭さに注意させる。

第三時（六月二十三日(木)）

1 順に読んでいく。（黙読、音読を組みあわせて）

・難解な表現を考え、すぐれた表現を味わう。

・わたしと踊り子の心の動きをとらえる。

2 「伊豆の踊り子」最後の場面を読んできかせる。

Ⅲ 「草枕」（四時間）

主要目標 漱石の考え方を知る。

第一時（六月二十九日(水)）

夏目漱石｝
草　枕｝について概観

第二・三時（六月三十日(木)、七月一日(金)）

本文通読・読解

第四時（七月四日(月)）

全文鑑賞

不人情・非人情について考える。

注 「舞踏会」の項に、A・BとあるのはA・B二クラスの意。Bの方はどちらかといえば、頭で理解しようとする、理詰めでいこうとする生徒が活発であるため、小説になじまず、このような、小説単元のとりあつかいとして、もっとも拙劣なものとなったもの。

各授業で感じたことを中心に問題点をはっきりさせていきたい。「舞踏会」の学習でとくに感じたことは、感想を持たないということである。とくにBクラスでは、「何も感じません。」と平然としている。Aの方ではわりにすなおなものが出、自然に主題に迫る話しあいにすゝめたのであるが、これも、クラスの⅓の生徒をフルに活動させての話である。後でもふれるように、感想を持たない、書こうとしないというのは、全学年を通じていえることで、もっとも頭を痛める問題である。話しあいができないということも同様で

ある。

「伊豆の踊り子」では、「舞踏会」同様感想文の問題ももちろんあるが、それ以上に困ったのは、この「踊り子」と「わたし」の心情のふれあいのとりあつかいであった。「舞踏会」でも中にはそういう面でこだわっていた生徒もいたようであるが、この「伊豆の踊り子」ではそれがもっとはっきりした形であらわれているので困った。Aクラスではそれほどでもなかったのだが、Bクラスではとくに目立ったようである。できのよい生徒が多く、こだわっているように見受けられた。これにはここの生徒が日頃読んでいる本の影響が見逃せないように思う。清純なものとして味わうことを何か邪魔されている感じがある。と同時に、ことばを知らないということも見逃せない。たとえば、「踊り子」が「わたし」の前に出るとぎこちなくなるという描写がある。「何故だろう」というのに対して答えようとしない。好き嫌いということばを口にするのを恥しく感じる、かといってそれにかわることばは知らない、というとこから/きているようである。感想を発表したがらない、書きたがらないというのも、このへんに原因が求められるように思われる。この「伊豆の踊り子」では、そういう心情の面でつっこんだ話しあいができなかったようで残念である。これは、離島に限ったことでなく、こういう年令の生徒に与える教材を選ぶ場合、考えるべき点ではないかと思われる。

最後に「草枕。」小説が並んでいることに生徒はいささかうんざりしてきているように見受けられた。それにここに採られているのは、例の「観海寺」のところで、会話の妙味のあるところであるが、生徒にはこのおもしろさはむずかしいように見えた。むやみに漢語が出てきてむずかしいという印象を残したようである。話しあうことも躊躇され、何となくいっしょに読んですませたという感じを強くする。非人情、不人情についてもピンとこないようであった。「草枕」は一年では、とくに一学期では無理ではないかという気がする。

以上授業を通じて感じたことをあげてきたのであるが、これをまとめて、次の四点を考えてみたいと思う。すなわち、

(1) 生徒の読書の実態について
(2) 感想文について
(3) 教材について
(4) 愛情の問題をとりあつかった教材について

まず(1)の問題について。ここの生徒はどんな本を読んでいるか。これについては図表1・2のような調査結果がある。これは授業の合い間のわずかな時間をとって簡単に調べたものだが、だいたいの実態は示していると思われる。赴任当初、「どんなものを読んでいるか」という問を出し、まずマンガ、次に新聞、週刊誌、雑誌という答を得てがっかりしたことがあったが、この調査をして、今度は真剣に考えざるを得なくなった。勿論外、漱石は知らなくても、石坂洋次郎、松本清張の名はすぐにあげることができる生徒。「破戒」「たけらべ」は知らなくても、「金閣寺」「三等重役」については語ることができるのである。図書室の本も、獅子文六、大仏次郎、谷崎潤一郎、川端康成あたりまでの本はひどくいたんでいるが、中島敦、志賀直哉あたりになると新品同様きれいにしている。彼らは興味本位に、おもしろさにつられて読んでいるのである。筋を追うばかりではないかと思う。こういう俗っぽい（語弊があるが）小説

にならされた頭で読むから、さきに述べた「伊豆の踊り子」のようなことになるのだと思われる。国語の本に出てくる小説はねむくなるというのもうなずけるような気がしてくる。文学というものとの接触をこのまゝにしておくわけにはいかないし、かといって、どうしたらいいのか、今の私には手におえないように思う。と同時に、今生徒にすすめていい本は一体何なのかと考え込まざるをえない。私たちが育った時代とは時代がちがうのではないか（少し大げさだが）、もう石坂なり三島なりを、漱石・鷗外と同じようにすすめてもいいのではないかという気がするのである。

離島では完備した図書館というものもなく、また、町のように本屋に行けばすぐ手にはいるというわけにもいかない状態で、生徒の眼にふれる作品は予想外に少ないのである。ここにあげられるような作家のものを読むのもそういう環境によるのである。何を読んでよいかわからない。そこで、新聞の広告に出ているもの、店先にはでにかざられているものを読むということになるわけである。本に接する機会に恵まれないことから、本を読むことが少なくなり、読むことを厭うことになる。読むにしても、やさしいもの、おもしろいものに限られてくる。こういう一文がある。

「僕は小説というものは全然興味をもたない。友達が開げて読んでいるのを見てでも、外で遊べば良いのにと僕は思う。しかしこの前先生が小説を読んで聞かせるといって手に持った時には、僕は「えいくそ」と思ったが、僕一人が文句を言っても同じことと思ってしかたなく聞いていたが、後では知らぬ間にその本につられて僕もその本の内容の出てくる人の動作又は風景などを想像していた。僕は先生が本を読んでしまった時には、おもしろいと思った。今まで僕はまんがの本ばかりにつられていて小説などは時々前にある写真などを見ただけであった。僕が小説を読むといっても江戸川乱歩の探偵小説を数えるほどしか読んでないが探偵はマンガを読む位好きであるけれども、「伊豆の踊り子」や「舞踏会」などは自分では読む気持にはなれないが人から読んでもらって聞くのなら少し好きだ。けれども僕はまだマンガや探偵小説などがずっと好きだ。」

（一年　S男）

時々予定外の時間などに短編を読んで聞かせることがあるが、ほとんど全員が一心に聞いている。一年生に有島武郎の「一房のぶどう」を読んでやったときなど、あまり熱心なのでかえって驚かされたくらいである。いい本、いい話に飢えているのではないかという感じがすることがある。したがってなおさら、どういう本をすすめるといいのかと考えさせられるのである。

このように、読む生徒が限られ、読む本が限られると、自然それについて話しあうということはなく、感想をのべあうこともないわけである。ここの生徒が感想を書いたり、述べたりすることを嫌うのにははなはだしいものがある。先の時間外に読んで聞かせる話にしても、まず「感想文を書かないでいいのか」と確かめ、書かせないと約束すると安心して聞く態勢になるといったありさまです。これに関連して生徒の書いたものを二、三あげてみる。

「小説を読んで小説を読んだ感想を書けといっても僕は書かん。どうして書かんかといっても、書くのはいやだ。読んで感想を書かなくても思えばいい。おもったことを書けといっても書かん。僕は書くということはいやだ。だから書きません。」（一年　K男）

「私は小説は今まであまり読んでなく、あまり興味も持っていま

せんでしたが、国語で小説を学んでから、少し読んでみようと思う気になりました。でも川端康成等の書いた小説にはあまり興味はありません。でも中学校の時とくらべると、少しは小説に興味を持つようになりました。今から少しずつ小説を読もうと思います。でも私は始めから小説にはあまり興味がありません。

私はこんな紙に色々なものを書くのが嫌いです。ですから、今からはいろいろなものを書かせないようにしてください。こんな紙をもらうと又かと思っていやになりますから。」（一年　Y女）

「小説などを読むのは興味がないので、読もうとしないので感想文をどう書いていいかわからない。

小説といって全部が全部みたくないというのではなく、悲しい小説などは読んでいる。中学校にいる時は小説などは全然読んでいなかったが高校にはいって国語で小説の所が出てきたので少しは読まなければと思っています。

私は先生から白い紙をもらうとすぐ頭がいたくなります。あまり白い紙をわたさないでください。」（一年　F女）

これは極端な例であるが、大なり小なり、大部分の生徒がこんな気持ちではないかと思われる。むずかしいことを書く必要はない、感じたことを、好きとか嫌いとか、こんなことばが気に入ったとかを書けばいいのだといっても効果はない。あらすじを書いてすましているのがいたりするのである。感想ののべ方、書き方を知らないともいえる。「伊豆の踊り子」の場合も人のを聞いて、あんな書き方があるのかとわかったというのがあった。また、これは三年生の例であるが、圏外の「寒山拾得」をやったとき、「何も感じません」というのに、「いったいどうして寒山拾得は逃げ出したのか、変だと思わないか、一体寒山拾得は文珠、普賢なのか」と問いかけると、急に話しはじめ、書きはじめたということがあった。一つには教材の違いも考えられる。「舞踏会」にしろ、「伊豆の踊り子」にしろ、生徒の生活感情に直接にひびくものが少なかったのではないかと思われるのである。前単元に関連して読んで聞かせた「芋粥」に対しては、かなりの反応を示している。次に例を示してみる。

「五位は大へん見下げられている。いくじがないのか、大へんな人物か、芥川竜之介は五位を大へんいくじのないように書いている。僕は意気地がないとばかりは思えない。周囲の人達が、大へんいくじのない人達ばかりだろう。世間の人達は、あわれみがない。身なりで人格を決めてしまうのは良くない。人間は、日の出ばかりおがんではいけない。日の入りもおがまなくちゃあ。五位がいくじのなくなったのは、まわりの人間のためだと思う。五位が何かを言えばあざわらい、たとえ筋が通っていてもほんとうにしない。そんなことだから五位も次第に無口、人から何を言われても何も言えない。僕は、そういう周囲の人達に、反ぱつさえ感じる。」

（一年　T男）

「これは五位という人の話である。彼の姿はだらしなく、みにくくできていた。子供達にからかわれても、どうにもすることができないほど、気が弱かった。こんな彼にもたった一つの欲望があった。『芋粥に飽きたい』ということだった。彼はそのためのみ生きていたといってよいだろう。少したって彼の欲望はかなえられた。しかし僕は彼の欲望は『小さな欲望』『みじめな欲望』にしかほかならないと思う。もっと価値のある空想的でない真実性のある欲望がほしいものだ。五位の性格はだらしなく、不正を不正と感じな

い。こんなことでよいだろうか。しかし彼の心には子供のようなむじゃきさ、いじらしさがあった。それは同りょうにいたずらをされたとき、「いけぬのうお身たちは」というところに表われていた。

人間は満されるか、満されないかわからない欲望のために、一生をささげてしまう。それを笑うものは路傍の人となってしまう。ぼくは思う。今の世代に自分の欲望のために、他人の自由を侵しあう人々、欲望の見えない糸にあやつられ、必死に金をためる人。僕は『がめつい奴』という本を読んだが、あのばばのような生き方はこれによく似ている。こんな生き方はよくないと思う。

欲望にあやつられ、敬賀までいって、最後に満足しえなかった五位がほんとうにかわいそうだ。」（一年　O男）

もちろん、「舞踏会」や「伊豆の踊り子」にも素直に反応してほしいのであるが、まだその前の段階にあるとみて、そこから出発した方がよさそうに思えるのである。

また、小説は一度に二つくらいでいいのではないかと思われる。いろ〳〵の種類に、多くの作家にあたらせたいのはやまやまであるけれども、これまた順に少しずつやっていった方がいいように思われる。教科書の運用に一工夫しなければと反省させられている。

最後に、愛情の問題をとりあつかった教材について。いわゆる思春期にある高校生に対して、愛情の問題は素通りできぬものであると思う。とくに離島という限られた地域で生活している生徒たちは、都会の生徒たちのように種々雑多の人に接するというわけにいかず、自然そういう対人関係の面でおくれている面が少なくないように思え、男女間の交際にしても特殊に見がちであるように思える。

こういう生徒たちに、人間間の愛情を真剣に考えさせるにはどうすればいいか、今のところただ当惑しているというほかはない。

以上、わずか三ヵ月ばかりの実践の中から、とくに小説の単元を通して感じたことを記してみた。かならずしも離島に限らない問題であるかもしれない。あるいは幼稚な問題であるかもしれない。が、今の私にはいずれも大きな問題である。おおかたのご批判、ご指導をお受けしたいと思う。

（長崎県北松西高校教諭）

表1

調査

1 石原慎太郎　2 源氏鶏太　3 石坂洋次郎　4 三島由紀夫　5 松本清張　6 獅子文六　7 川口松太郎　8 江戸川乱歩　9 山手樹一郎　10 柴田錬三郎　11 井上靖　12 火野葦平　13 大江健三郎　14 犬養道子　15 五味川純平　16 壺井栄　17 石川達三　18 原田康子　19 円地文子　20 尾崎士郎　21 幸田文　22 曾野綾子　23 吉屋信子　24 大岡昇平　25 村上元三　26 林房雄　27 富田常雄　28 舟橋聖一　29 新田次郎　30 芹沢光治良　31 小糸のぶ

注1　調査方法

中央図書刊「最新国語総合便覧」中の近代日本文学主要作家、作品の項にあげてある作家（別記）についての知識を調査した後、「ここにあげてある作家以外の作家で知っているのがあれば、書きなさい。」として調査したもの。

注2　気づき

○週刊誌、娯楽雑誌、婦人雑誌の執筆者が多くあげられていることに注目される。

○いわゆるベストセラーとなった作品の著者もよく知られている。

○近代日本文学主要作家

芥川竜之介　有島武郎　泉鏡花　井伏鱒二　岡本かの子　尾崎紅葉　葛西善蔵　川上眉山　菊地寛　久保栄　倉田百三　小杉天外　里見弴　島崎藤村　太宰治　田山花袋　徳田秋声　直木三十五　中島敦　夏目漱石　林芙美子　広津和郎　北条民雄　真山青果　室生犀星　横光利一　岩野泡鳴　岡本綺堂　小山内薫　仮名垣魯文　川端康成　岸田国士　久保田万太郎　黒島伝治　小林多喜二　志賀直哉　鈴木三重吉　谷崎潤一郎　坪内逍遙　徳富蘆花　永井荷風　中村吉蔵　丹羽文雄　樋口一葉　藤森成吉　堀辰雄　宮沢賢治　森鷗外　宮本百合子　宇野浩二　小川未明　大仏次郎　嘉村礒多　上林暁　国木田独歩　久米正雄　幸田露伴　佐藤春夫　島木健作　武田麟太郎　田宮虎彦　坪田譲治　徳永直　中勘助　長与善郎　野上弥生子　平林たい子　二葉亭四迷　正宗白鳥　武者小路実篤　山本有三　吉川英治

表2

調査2

順位	書名	知っている生徒数	読んだ生徒数	順位	書名	知っている生徒数	読んだ生徒数
1	坊っちゃん	186	87	55	或阿呆の一生	32	0
2	伊豆の踊り子	163	118	56	阿部一族	32	2
3	吾が輩は猫である	162	74	57	あひびき	31	0
4	三四郎	154	32	58	出家とその弟子	30	3
5	大菩薩峠	142	25	59	それから	28	2
6	暗夜行路	139	37	60	波	26	4
7	たけくらべ	137	43	61	足跡	24	2
8	夕鶴	129	30	62	蓼喰ふ虫	23	1
9	金色夜叉	128	22	63	おかめ笹	21	0
10	草枕	122	41	64	その妹	20	7
11	細雪	120	32	64	真理先生	20	9
12	不如帰	114	18	66	生活の探求	18	2
13	鼻	113	39	67	桐一葉	16	1
14	五重の塔	121	16	68	田園のゆううつ	15	1
15	人生劇場	105	17	69	桑の実	14	2
16	浮雲	103	15	70	冬の宿	13	1
17	破戒	101	24	71	おめでたき人々	13	5
18	千羽鶴	94	13	72	紋章	13	1
18	夜明け前	94	19	73	蒲団	12	1
20	嵐	84	14	74	縮図	12	1
21	放浪記	81	13	75	家	12	0
22	友情	79	57	76	何処へ	11	0
23	雪国	77	10	77	煤煙	10	1
24	平凡	76	14	77	播州平野	10	2
25	伸子	75	4	77	新生	10	1
26	高瀬舟	74	12	80	絵本	9	1
27	風立ちぬ	70	18	80	多情多恨	9	1
28	修禅寺物語	66	8	82	忠直卿行状記	8	5
29	田舎教師	63	14	82	彼岸過迄	8	2
30	雁	58	12	84	其面影	7	0
30	或る女	58	2	84	火山灰地	7	0
32	河童	55	8	84	春	7	0
33	明暗	54	2	84	竹沢先生といふ人	7	1
33	土	54	4	84	海に生くる人々	6	0
35	太陽のない街	53	5	88	高野聖	5	0
36	独逸留学	52	6	89	機械	5	1
36	道標	52	8	89	当世書生気質	5	0
38	思い出の記	51	4	89	和解	4	0
39	若い人	50	13	92	刺青	4	1
39	旅愁	50	8	92	くれの二十八日	4	0
39	にごりえ	50	7	92	妻よねむれ	4	0
39	あにいもうと	50	7	96	枯木のある風景	3	0
43	青年	49	5	96	冷笑	3	0
44	父帰る	47	8	96	斜陽	3	0
45	心	46	10	96	仮装人物	3	0
46	蟹工船	43	4	96	多情仏心	3	0
47	春琴抄	41	2	101	微	2	1
48	人間失格	39	7	101	火の柱	2	0
49	街車	38	3	101	子をつれて	2	0
50	あらくれ	37	3	101	無限抱擁	2	0
51	道草	37	3	101	多甚古村	2	0
52	即興詩人	34	11	101	党生活者	2	0
52	温泉綺譚	34	2	107	カインの末裔	1	0
54	舞姫	33	4	107	静かなる山々	1	0
				107	青春	1	1
				107	渋江抽斎	1	0

注1、調査方法

前記作品名を列記した用紙を配布し、「読んだことのある作品名に◎印を、読んだことはないが知っているもの（映画・ラジオ・テレビ等で見たり聞いたりしたもの。ダイジェストを読んだもの。途中まで読んだものなど）に○印をつけなさい。」として調査した。なお別記した作品は、中央図書刊の「最新国語総合便覧」（六八ページ——八一ページ）に近代日本文学主要作品としてあげてあるものである。

注2、気づき

○上位あるものは、いずれも教科書にのせられるか、あるいは映画などで有名になっているものである。

○知っている生徒数と読んだ生徒数の差の大きいものは、多く映画化された作品である。